

『イタリア学会誌』執筆規定

投稿者各位

各論文の統一性を図るために、必ず、以下の「学会誌執筆規定」に沿って執筆して下さい。

執筆規定を設けた理由

これまで（『イタリア学会誌』第58号まで）、執筆規定なるものは存在しなかった。そのため、各執筆者の裁量に任せられ、各自の常識と嗜好に沿って執筆されてきたが、近年、このやり方では新しい状況に対応できなくなってきた。

第一に、若い研究者における論文作成に関する知識の欠如から、極めて恣意的で不統一な記述が目立っていた。編集段階でこれらの誤った記述を逐一書き直していく作業は膨大となる。一方、若い研究者にとっても執筆規定の存在は、論文作成マニュアルとして重宝されるはずである。

第2に、古い世代の研究者の従来記述法と新しい世代の新しい記述法の違いも目立つようになってきていた。加えて、『イタリア学会誌』には様々な分野の研究者が寄稿するため、不統一の感を免れえなかった。同一の号において、同じイタリア語に対する異なる表記が存在することも稀ではなかった。不統一を避けるためにも、何らかの共通の指針が執筆者に提示される必要は急務であった。

第3に、近年、投稿論文の急激な増大に従って、多くの論文を掲載する必要が生じた。従来「引用一註（後付け）」方式では繰り返しが多く、多くの紙幅を消費してしまう。対して、近年多くの学問分野で採用されてきている「著書一刊行年」方式を採用すると、それだけで、論文1本分に匹敵する紙幅が新たに生まれる。1本でも多くの論文を掲載する機会を学会員に提供すべく、この方式が採用された。

第4に、「著書一刊行年」方式は誌面の有効活用だけでなく、もう一つの効用をもたらす。引用参考文献が最後に一括して示されることで、執筆者が先行研究にどれだけ深くかかわってきているか、どれだけの欧文論文に精通しているかが一目瞭然に読者に提示されるため、従来のような引用論文の反復による水増しがきかなくなり、引用文献の貧弱さが際立つようになった。このため、最近の投稿論文では確実に引用される欧文文献が増えてきている。これは確実に研究の質を高める重要な効用と言える。加えて、従来方式だと、cit. や ibid. が多用され、読者がどの論文を指すのか、毎回、頁を繰って探し回る煩雑さが付きまとう。しかも、従来註はすべて一括して論文の最後に示されているため、註を読むために、頁を繰って、該当の註を探さなければならない煩わしさがあった。新方式だと、脚注のため、読者の便宜も同時に図られている。

以上のような、状況と問題から、このような統一した執筆規定を設けた次第である。

執筆規定の目的

執筆規定を設けた理由といくつか重複するが、上記の説明を補いながら、この執筆規定の目的を明確にしておきたい。というのも、以下の執筆規定における引用・記述方法に異

を唱える執筆者はこれまで皆無であったが、日本語表記に関しては、若干の異論のある方も想定されるからである。とりわけ、執筆規定「9. 表記全般の規定」⑧、⑨に関してである。(詳細は、⑨を参照願いたい。)

執筆規定の第一の目的は、同一の研究誌に寄稿する異なる分野・異なる世代の研究者の記述を統一させることにある。(イタリアの都市で屋根瓦を同じ色に統一する法律があるのと同じである。)そこでは個人的な趣味や嗜好よりも公共性が優先される。(それでも、日本語表記に関しては、個人の裁量はある程度認められているが。)その結果、編集作業も簡便化され、編集者の荷重も軽減される。

また、イタリア学の専門学会として、ある程度統一した基準(表記法)を示し、教育的配慮も含めて、率先して範を垂れるべきであろうと考えるからである。学問は進歩し、時代も基準も変化する以上、古い、珍妙な表記は排されなければならないし、他分野の学会や専門家が採用している表記を採り入れる必要がある。従って、執筆規定は編集委員会の恣意的な強制ではなく、本学会の公共性から生まれたものだという事を執筆者各位に認識していただきたい。以下、特に注意すべき点、誤り易い点は赤字で記してある。

1. 執筆上の注意

①註は脚注方式とし、¹ ² …と番号をふって、各頁の下に註を作成する。

*文末に脚注番号を付す時、脚注番号の後にピリオッドまたは句読点に来る。

(例) ~である¹。

②引用文献は、論文の最後に参考文献の一覧「文献一覧」(「著書-刊行年」方式)を付し、本文中で引用した著作を一括して載せる。

③欧文文字の場合、必ずピリオッドやコンマのあと、スペースをもうける。

(誤) P.P.Pasolini → (正) P. P. Pasolini
半角スペースあり

2. 引用参考文献の表記の仕方

①引用文献は【テキスト】と【欧文引用文献】に分ける。

必要があれば、【邦文引用文献】を別立てで追加する。

必要があれば、【略号】や【辞書・辞典・コンコーダンス類】の分類を追加する。その場合、【辞書・辞典・コンコーダンス類】において略語のあるものは【略号】に分類し、略語のないものは【辞書・辞典・コンコーダンス類】に分類する。

②作品・著作はアルファベット順に並べる。

(例)

【略号】(必要があれば)

DD *Dizionario della Divina Commedia*, a cura di R. Merlante, Bologna, 1999.

ED *Enciclopedia dantesca*, Roma, 1970-1978.

FC «*Filologia e Critica*»

GDLI S. Battaglia, *Grande dizionario della lingua italiana*, Torino, 1961 sgg.

【辞書・辞典・コンコーダンス類】（必要があれば）

Merguet H.

1972 *Lexikon zu den Reden des Cicero*, 3 voll., Hildesheim.

【テキスト】

Dante Alighieri

Conv. *Convivio*, a cura di C. Vasoli e D. De Robertis, vol. II, t. II. Milano-Napoli, Ricciardi, 1995.

D. C. *La Divina Commedia. Inferno*, a cura di T. Di Salvo, Bologna, Zanichelli, 1985.

Egl. *Epistole, Egloge, Quaestio de aqua et terra*, a cura di A. Frugoni, G. Brugnoli, E. Cecchini, F. Mazzoni, vol. III, t. II. Milano-Napoli, Ricciardi, 1996.

V. N. *Vita Nuova, Rime*, a cura di D. De Robertis e G. Contini, vol. I, t. I. Milano-Napoli, Ricciardi, 1995.

【引用参考文献】

《単行本に所収の欧文文献の場合》

コンマなしで、半角空ける

↓
著者の姓 名前（頭文字のみ）.

出版年 文献名（イタリック）, in（不変） + 著者名または編者名（a cura di）, 著作名（イタリック）, 出版地, 出版社名, 頁数（p./pp.を省く）.

（例）

Brugnoli G.

1989a *Le «cagne conte»*, in *Filologia e critica dantesca. Studi offerti a Aldo Vallone*, Firenze, Olschki, 95-112.

1989b *Sic notus Ulixes?*, in *Miscellanea di studi in onore di Aurelio Roncaglia a cinquant'anni dalla sua laurea*, Modena, Mucchi, 227-240.

*同年の著作が複数ある場合、上記のように a, b と区別する。

《雑誌に掲載された欧文論文の場合》

雑誌名はイタリックにしない。

コンマなしで、半角空ける

↓
著者の姓 名前（頭文字のみ）.

イタリックにしない

↓

出版年 論文名（イタリック）, in（不変） + «雑誌名», 巻数, 頁数（p./pp.を省く）.

（例）

Vecchi G.

1960 *Sulla teoria dei ritmi mediolatini. Problemi di classificazione*, in «Medioevo Romanzo» XV, 301-324.

《注》雑誌名を前後で括る記号 « » は、パソコンの「挿入」をクリックし、「記号と特殊文字」を選び、その中から取り出す。日本語の記号《 》ではない点に注意。

《Atti 名を表記する場合》

Atti 名は、イタリックにしない。

(例)

Banfi E.

2005 *Formazione delle parole in cinese mandarino e questioni di deriva tipologica*, in Grossmann-Thornton (a cura di), *La formazione delle parole. Atti del XXXVII Congresso Internazionale di Studi della Società di Linguistica Italiana* (L'Aquila, 25-27 settembre 2003), Roma, Bulzoni, 53-68.

《原典に当たることができず、孫引きする場合》

(例)

Smith C.

1966 *Chomsky and Bees*, Chattanooga, Vallecchiara Press, 56 [*cit.* in Sedanelli, C. (1967), *Il linguaggio delle api*, Milano, Gastaldi, 45]

*この場合、原典がSmithの著作であり、Sedanelliの著作から借用(孫引き)したことを示す。

3. 本文中における引用文献の示し方

本文中の文献の引用箇所において、「著者の姓と出版年：頁」を本文内に書く。

*コロン(:)の前は、常にスペースなし。コロンの後は常にスペースあり。

(例 1)

「～である。」 (Jaberg 1939a: 287-291)

スペースなし
↓
↑
半角スペースあり

(例 2) スペー

Jaberg (1939a: 287) は、「～である」と述べている。

スペースなし
↓
↑
半角スペースあり

4. 本文への引用文の挿入方法

引用文は以下の要領で本文中に挿入する。

《段落を改めて、日本文を引用する場合》

上下に1行分のスペースを設けると同時に、左右に1文字分のスペースを設ける。また、活字のポイントを1point落とす。

(例)

アリストテレスは『詩学』第9章1451bで、次のように述べている。

歴史家と詩人の違いは、韻文で書くか、散文で書くかによるものではない。そうではなくて、歴史家が生起した事柄を述べるに対して、詩人が生起する可能性のあることを述べる点で異なるのである。それゆえ、詩の方が歴史よりも優れて哲学的であり、荘重でもある。なぜなら、詩がより普遍的なものを述べるのに対して、歴史家はより個別的なものを述べるからである。

《段落を改めて、欧文を引用する場合》

上下に1行分のスペースを設けると同時に、左右にスペース(半角5文字分)を設ける。また、活字のポイントを1point落とす。

(例)

スペースなし
↓

Rohlf (1972:146) は、次のように述べている。
↑半角スペースあり

Nella *Divina Commedia* Dante usa entrambe le forme, quella femminile in rima (Par., XVII, 43). Quest’ultima è la forma corrente nell’Italia settentrionale, secondo uno sviluppo comune alle lingue romanze occidentali: *oreille, oreja, orelba*. (『神曲』の中でダンテは両方の形を用いているが、女性形は脚韻で用いている(天国篇第17歌43)。この女性形は、西方ロマンス言語に～*oreille, oreja, orelba*のように～共通の発展に従ったものであり、北イタリアで用いられる形である。)

《段落を改めずに、欧文を引用する場合》

引用箇所の前後に《 》の記号を付して挿入する。ただし、本文内の引用欧文は2行を目安とする。3行以上になるときは、(例2)のように段落を改める。

(例) スペースなし;半角スペースあり
 ↓

Chiavacci Leonardi (1999: 273) は、「Dante forse vuole anche ricordare Brunetto come un vincitore, e non come un perdente」(ダンテはおそらくブルネットを敗者としてではなく、勝者として思い起こさせようとしているのであろう)と述べている。

*以上の例に当てはまらない複雑な引用の場合、どれかを註に落とし、脚注で出典を指示

すると判り易いし、煩雑さを避けることができる。なお、よくある間違いとして、引用の後のピリオドの位置がある。

(誤) ... effettivamente di Pietro. » → (正) ...effettivamente di Pietro.».

5. 本文や脚注に欧文の語句などを引用する場合

《単にテキストの原文を明示する場合》

(例)

彼女は「目を閉じて chiude gli occhi」

《テキストの単語や表現を原語で明示したい場合》

(例)

「ロープのように《はらわた viscere》がよじれる」

《単に外国語で表現したい場合》

(例1) *訳を付ける場合

因習的な prima amorosa (恋する娘) に転じて、・・・

(例2) *訳なしの場合 (そのまま)

ボッカッチョの opere minori は宮廷文学として

6. 本文における作品名の引用の仕方

(例)

Il filosofo inglese (『イギリスの哲学者』初演 1754)

7. 脚注における文献の示し方

脚注の中で文献を指すときは、以下のように「著者の姓 (出版年：頁)」を記す。

(例1) スペースなし

Jaberg (1939b: 157) が述べているように、私は～。

↑ ↑
半角スペースあり

(例2) スペースなし:

Cfr. Banfi (1999: 13): «Pause, interruzioni e silenzi rappresentano elementi essenziali di ogni interazione linguistica: le lingue storico-naturali sono, innanzi tutto, ...»

↓ ↓
半角スペースあり

*なお、(引用) ». (ピリオドは » の後)

(例3) スペースなし
Cfr. Bellucci (2005a: 216-142).
 ↑ ↑
 半角スペースあり

(例4) スペースなし
また Grimaldi (1996: 112) を参照。
 ↑ ↑
 半角スペースあり

《複数の文献を表示する場合、セミicolon (;) を用いる》

(例5)
J. Bowden (1951: 15); B. Nardi (1959); ...

8. 章立てに関する規定

「1. 問題の所在」「2. 既存の解釈」などのように、章立てには必ず番号を付ける。
「1.2. 不定詞が自動詞の場合」のように下位区分を設ける場合は、下位区分は2つまでとする。(例：4.2.1.) これ以上、細かく区分しないこと。

9. 表記全般の規定

① 欧文の場合、最後の文字の後には、必ず半角スペースを設ける。勿論、半角以上の余分のスペースを設けすぎてもいけない。

(例)
 ↓
Atti del Convegno (Venezia-Pordenone 4-6 dicembre 1986) ○
Atti del Convegno(Venezia-Pordenone 4-6 dicembre 1986) ×
Atti del Convegno (Venezia-Pordenone 4-6 dicembre 1986) ×

② punto 「点 (.)」、virgola 「コンマ (,)」、punto e virgola 「セミicolon (;)」、due punti 「コロロン (:)」といった句読点の後には、必ず半角スペースを入れる。
ただし、ハイフンの前後には、スペースを入れない。

(例) 誤 正
p.153 × → p. 153 ○
pp. 153 - 155 × → pp. 153-155 ○
vol.5 × → vol. 5 ○

③ アラビア数字はすべて半角にする。

(例) 誤 正
「1 7 5 7年に」× → 「1757年に」○

④ 欧文は必ず左右のマージンを揃える。

⑤ 「版」に関する表記。

(例) 第2版 → 2° ed.

第3版 → 3° ed.

↑
半角スペースあり

⑥ 註や本文において用いる略語一覧

cfr. : confronta 「参照」

*文頭に来るときのみ Cfr.。欧文だけでの指示に使用し、日本語の文章内では「～を参照(のこと)」などの日本語表記の方が間違いがない(参考意見)。

(例: 註において)²⁰ Cfr. Brizzi (1989: 19).

↑
ピリオドを付ける

fig. : figura 「図」

(例) fig. 3

↑
半角スペースあり

ms./ mss. ㊦ : manoscritto/manoscritti 「写本」

n. / nn. ㊦ : nota/ note 「註」

p. / pp. ㊦ : pagina/pagine 「頁」

ris. anas. : ristampa anastatica 「(再版された) リプリント版」

s. d. : sine die 「出版年などの日付不明」

sic : 「原文のまま」(疑わしいか、明らかに間違った原文をそのまま引用する際、その引用語句の後に通例、括弧に入れて付記する)

s. l. : sine loco 「出版地不明」

s. v. : sub voce 「～の語の下に、(辞書や事典の) ～という見出し語を見よ」

v. / vv. ㊦ : verso/versi 「詩行」 *v. 61/ vv. 61-78

vol. / voll. ㊦ : volume/volumi 「巻」 *全2巻本であれば、2 voll.

⑥ 以下の略語は用いない。

ibid. : *ibidem* 「同じ著書と同じ頁に」

id. ㊦ : *idem* 「(最後に示された) 同じ男性の著者」

ead. ㊦ : *eadem* 「(最後に示された) 同じ女性の著者」

infra : 「下記参照」

loc. cit. : *loco citato* 「上記引用文中に」

NB	: <i>Nota bene</i> 「よく注意せよ、註記」
<i>op. cit.</i>	: <i>opere citato</i> 「前掲引用書中に」
<i>passim</i>	: 「随所に」(著作全体に頻出し、頁が特定されない場合)
<i>supra</i>	: 「上記参照」

⑦ 以下のような日本語の副詞に関して、ひらがなを推奨する(参考意見)。

(例) 最早 → もはや

(例) 色々 → いろいろ

⑧ ギリシャ・ローマ神話などの人物名は長音記号に注意すること。ギリシャ神話の人物名については高津春繁著『ギリシャ・ローマ神話辞典』(岩波)を参考にする。ただし、ラテン語の長音に関してはPertsch編纂の *Langenscheidts Handwörterbuch, Lateinisch-Deutsch* が最も正確とされている。なお古典作家・作品名に関しては、『ギリシア文学を学ぶ人のために』、『ラテン文学を学ぶ人のために』(世界思潮社)に最も正確な表記が載っている。

(例) アドニス→アドーニス(『ギリシャ・ローマ神話辞典』, Pertsch)

(例) クピド→クピードー(同上)

(例) プシュケ→プシューケー(『ギリシャ・ローマ神話辞典』)

(例) 『アエネイス』→『アエネーイス』(Pertsch, 『ラテン文学を学ぶ・・・』)

(例) アエネアス→アエネーアース(Pertsch, 『ラテン文学を学ぶ人・・・』)

(例) キケロ→キケロー(Pertsch, 『ラテン文学を学ぶ人のために』)

(例) プルタルコス→プルータルコス(『ギリシア文学を学ぶ人のために』)

(例) ヴェルギリウス→ウェルギリウス(『ラテン文学を学ぶ人のために』)

(例) オヴィディウス→オウィディウス(『ラテン文学を学ぶ人のために』)

⑨ 個人名や地名に関して、原語に近づくよう長音記号および促音を付す。これはおおむね伊和辞典(小学館)に従えばよい。細かい地名に関しては、イタリア語の地図帳やアトラスにアクセントが付してあるので、それを参照すること。

(例) ルカ(Luca) → ルーカ

(例) ウゴ(Ugo) → ウーゴ

(例) カテリナ → カテリーナ

(例) カトリカ → カットーリカ(地名)

(例) ブレシャ → ブレッシェ(地名)

(例) リグリア州 → リグーリア州

(例) カリアリ(Cagliari) → カッリャリ(都市名)

*一般に、-gli-の発音は促音で表記すると、原音に最も近似する場合が多い。

また、Piètroのように、アクセントの後に子音が2つ以上続く場合、長音があまり感じ

られない場合が多い。(そもそもイタリア人にとって長・短の別は意識されないが。) このような場合、アクセントの所在を示すために「ピエートロ」と表記しても、原音に近似させるために「ピエトロ」と表記しても、どちらでも構わないものとする。

ただし、未だ慣習が根強く残っているため、Torino を「トリーノ」、Siena を「シエーナ」、Genova 「ジェーノヴァ」と表記するには抵抗感があるかもしれない。同じく、人名も Maria を「マリーア」、「プラトーン」「アリストテレース」などとすることにも煩瑣な印象を受けるかもしれない。ここに挙げた「聖母マリア」のような、すでに慣習となって市民権を得ている固有名詞に関しては執筆者の裁量に委ねることとする。将来的には長音による統一がふさわしいが、現段階では、そこまでのコンセンサスを得るには至っていないように思われるためである。

⑧と併せて、長音や促音を付す理由について、執筆者には以下の点をご承知おきいただきたい。

- *現代の各学会の傾向として、できるだけ原音に近づけようとする「原音主義」が主流になってきている。(それだけ、実際の外国語に触れる機会が増えたためでもある。かつては書物でしか知り得なかったため、研究者や一般人の多くが誤って読んでいた。例えば、かつては「ボッティチェルリ」などと珍妙に表記されていた。)
- *従来の表記では、実際の音に対応できない。初学者にとってもできるだけ早くアクセントの位置などを知っておくには如くはない。(例えば、「シエナ」と言っても、「cena」と間違えられた実話も存在する。「スィエーナ」が日本語での近似値であろうが、この表記は煩瑣であるため、「シエーナ」とされている。)
- *統一性を保持するため、『イタリア学会誌』は様々な分野の研究者が寄稿する場であり、各分野の人たちが各自それぞれの「嗜好」に沿って好きなように表記すると、同じ号において様々な表記が乱れ飛ぶ結果となる。統一性(社会性=公共性)のためには、個人の嗜好は抑制される必要がある。(イタリアの屋根瓦の色が法律で統制されているのと同じである。日本では赤でも黄色でも構わないが。)
- *イタリア学会は、イタリア研究の専門集団である。巷間には誤ったイタリア語の表記や発音が満ち溢れているが、そうした傾向を正すためにも、学会として率先として範を垂れるべきであろう。(例えば、「モナ・リザ」はイタリア語表記としては完全な誤りである。しかもイタリア人に苦笑を起こさせるものである。) 基準となる表記、学会としての統一基準を示す続けることは、決して無意味なこととは思われない。(でなければ、『学会』に何の意味があるだろうか。)

10. 欧文タイトルの副題について

従来は副題をハイフン (—) で繋いでいたが、現在のイタリアの雑誌でハイフンが使われる例が見当たらない。通常、ピリオッド (.) もしくはコロン (:) で繋がれている。従って、これに準じて、副題にハイフンを使わない。両者の使い分けであるが、説明的な副題にコロン (:) を用いる。(コロンの前にはスペースなし。)

(例 1)

La formazione della “Filosofia dello Spirito” — Le varianti intercorrenti tra le diverse edizioni (1902-1909) —

↓

La formazione della “Filosofia dello Spirito”^{スペースなし}: le varianti intercorrenti tra le diverse edizioni (1902-1909)
↑
小文字 (コロンの後は小文字)

(例 2)

Amor heroes: un’alienatio da espiare — I *remedia amoris* nella *Deifira* albertiana —

↓

Amor heroes: un’alienatio da espiare. I *remedia amoris* nella *Deifira* albertiana

(例 3)

Decameron: un *punctum doloens* nella tesi del Bembo — Analisi delle varianti tra le citazioni delle *Prose* e i due tesi del *Decameron* —

↓

Decameron: un *punctum doloens* nella tesi del Bembo. Analisi delle varianti tra le citazioni delle *Prose* e i due tesi del *Decameron*

* (:) がすでに題名の中で使われている (例 2) (例 3) の場合は、ピリオッド (.) で副題を繋ぐ。

* なお、外国語 (ラテン語など) はイタリックにすることを忘れないように。

日本語に関する若干の勧め～読者への便宜～

① 不要にひらがなを多用しない方が、読者には読みやすい。とりわけ、ひらがなが続くと、意味の切れ目が瞬時に見分けられないことがある。論文は詩ではなく、解説であるため、平易な漢字は使用する方が読者には読みやすい。

(例) かれはいった。 → 彼は言った。

ふたつの解釈がある。 → 二つの解釈がある。

あらずじである。 → 粗筋である。

破たんした。 → 破綻した。

ひとりである。 → 一人 (独り) である。

② 難解な漢字や専門用語には、読者のためにルビを振っておくとよい。

(例) 囹圄、^{れいぎよ} 肖る、^{あやか} 截然、^{せつぜん} 弩、^{いしゆみ} 弩砲、^{どほう} 二橈、^{じょう} 列船。

③ 句読点が極端に少ない (あるいは多い) 文とならないよう、注意すること。

最後に

論文だからといって、読者に苦痛を強いるものであってはならない。読んで楽しく（興味深く）、判り易いものでなければならぬ。各自の工夫を願うところである。

（文責：藤谷道夫）